

# Hamlet 試論—Hamlet と復讐

金城盛紀

## 1

*Hamlet* は周知の通り復讐劇である。交替に來た歩哨 Bernardo の “Who’s there?” で始まる冒頭から, “the rest is silence.”<sup>1</sup> で主人公が息をひきとる終幕に至るまで, *Hamlet* はその構造も, したがって主題も, 復讐をその根底にしている。文学のモナ・リザ, 演劇のスフィンクスと言われ, 各人各説どころか, 批評家が二人居れば三様の意見が出るとも言われてきたこの作品に接近する一つの道は復讐に託された意味を考えるとところに見出せると思われる。

*Hamlet* 先王の姿をした亡霊が王子 Hamlet に下す復讐せよとの命令は簡明直截である——“So art thou to revenge, when thou shalt hear.” (I.v.7) また, “Revenge his foul and most unnatural murder.” (25) しかし, 人間の本能に基づくであろう復讐心は, およそ文明, 秩序を脅かす原始的野蛮な感情でもあり, エリザベス朝においては, すでに宗教, 倫理, 法律と相入れないものとなっていた。パウロも戒めしている——「愛する者よ, 自ら復讐すな, ただ神の怒りに任せまつれ。録して『主いひ給ふ, 復讐するは我にあり我これに報いん』とあり。」<sup>2</sup> 復讐を “a kind of wild justice” であるとしたのは Francis Bacon であるが, この言辭をもって Bacon が復讐を正当化していると解釈する向きもある。しかし, この大法官にもなった経験主義者が, 私的復讐を容認したのではないことは “Of Revenge” を括る次の文章で明らかである。

This is certain, that a man that studieth revenge keeps his own wounds green, which otherwise would heal and do well. Public revenges are for the most part fortunate.... But in private revenges it is not so. Nay rather, vindictive persons live the life of witches; who as they are mischievous, so end they infortunate.<sup>3</sup>

Eleanor Prosser が, エリザベス朝における復讐について, 原資料に基づいて考究して得た結論は説得的である—「エリザベス朝の道德家たちは, 復讐が危険であることは言うに及ばず, 不法, 冒瀆, 不道德, 不合理, 不自然, かつ不健全であると非難した。」<sup>4</sup>

文学作品の理解を助けるために, それが成立した時代の精神風土や思想を視野に入れると, *Hamlet* の場合, 復讐の問題は作品解釈をいっそう複雑困難にする恐れさえ無しとしない。「亡霊の命令は, Hamlet にとって, 世界の性格と密接不可分にかかわっているが故に…彼は双方を容認するのでなければいずれをも容認することはできない」とは Maynard Mack の含蓄ある評言であるが,<sup>5</sup> 復讐の掟は, *Hamlet* に接近するにあたって “the common stumbling

block”であるのも事実である。<sup>6</sup> *Hamlet* における復讐の問題は、今日もなお「つまずきの石」である。わが国で最も多く読まれているテキスト版の一つで、高名な編者たちが、「*Hamlet* 劇は仇討ちの芝居ではない」と繰り返し強調し、「作者は復讐そのものを軽く扱っているのである」とその “Introduction” を締め括っているところにも窺われる。<sup>7</sup> また、中野里皓史氏の、復讐劇に内包する矛盾を論じて *Hamlet* の構造に光をあてた論文も、<sup>8</sup> Claudius 殺害を “painfully ugly” ときめつけている現時点で最も新しいと思われる *Hamlet* 論も、<sup>9</sup> 復讐劇としてのこの作品に対する批評家の関心が相変わらず強い事実を示唆している。

## 2

*Hamlet* の世界はいかなる世界であろうか。感性ゆたかな大学生王子 *Hamlet* にとって、デンマークは耐え難い程に墮落した、「胸のむかつく、汚らわしい物ばかりがはびこっている荒れ放題の庭」である。

How weary, stale, flat, and unprofitable  
Seem to me all the uses of this world!  
Fie on't, ah fie! 'tis an unweeded garden  
That grows to seed, things rank and gross in nature  
Possess it merely. That it should come to this!

(I. ii. 133-37)

自己の肉体をも含めて万物が汚れたと慨嘆し、厭世的になっているのは、先王の死の真相をその亡霊によって知らされる前であることは、注目に値する。*Hamlet* は敬愛していた父王の突然の死を悲しむ以上に母親の早過ぎた再婚に衝撃を受けているのである。母親は忌むしい、兄弟でありながら父と比ぶべくもない叔父 Claudius——“Hyperion to a satyr”(140)——の “incestuous sheets” (157) へいそいそと赴く。<sup>10</sup> 多感な青年にとって、信頼していた母親の崩壊墮落は、女性そのものの弱さを露呈するものであり、それはまた「世の関節がはずれた」(I.v. 188) ことを意味する。現実の母親の所業は、*Hamlet* の楽天的世界観を無惨にもゆさぶり破壊する “contagious blastments” (I. iii. 42) である。

デンマークの国がただならぬ情況下にあることは冒頭の暗く陰鬱で不気味な雰囲気によってすでに強く印象づけられている。寒中で警備に当たった Francisco の一言 “I am sick at heart” (I. i. 9) は、「気がめいる」という意味のみならず、その心臓部において病んでいる王国についても当てはまる。Horatio が、亡霊の出現について「国を乱す異変の前兆」(69) ではないかと心配し、Marcellus が、“Something is rotten in the state of Denmark.” (I.iv.89) と嘆ずる王国である。

異変の元凶、腐敗の根源は Claudius である。黒い喪服に暗い顔で(しかもその顔も背けて)、謎めいた言葉で拒絶反応を露にする *Hamlet* に対して、Claudius は、亡父への哀悼の念も過ぎたるは及ばざるがごとしと説教をする。

Fie, 'tis a fault to heaven,

A fault against the dead, fault to nature,  
To reason most absurd,...

(I. ii. 101-103)

天, 死者, 自然・人情に対する三重の罪であり, 理性に背く大逆は, まさにその Claudius が犯した弑逆篡奪であり, 「近親相姦」にほかならない。早過ぎた “incestious” な結婚を, Claudius は, 巧妙なレトリックを駆使して, 国の安寧を思ってたった処置施策であったと説明している。

Though yet of Hamlet our dear brother's death  
The memory be green, and that it us befitted  
To bear our hearts in grief, and our whole kingdom  
To be contracted in one brow of woe,  
Yet so far hath discretion fought with nature  
That we with wisest sorrow think on him  
Together with remembrance of ourselves.  
Therefore our sometime sister, now our queen,  
Th' imperial jointress to this warlike state,  
Have we, as 'twere with a defeated joy,  
With an auspicious, and a dropping eye,  
With mirth in funeral, and with dirge in marriage,  
In equal scale weighing delight and dole,  
Taken to wife.

(1-14)

Granville-Barker は, 僭王 Claudius は “a consummate hypocrite” であると言っているが,<sup>11</sup> hypocrite はギリシャ語で player を意味するから, この烙印は, 王を演じている Claudius に二重にふさわしいと言えよう。Claudius は「邪悪な支配者ではない」とする見方もあるが,<sup>12</sup> この篡奪王は, 本人も自覚している通り, 人類最初の呪い “the primal eldest curse” (Ⅲ.iii. 37) を受けた兄弟殺しの罪を犯し, また男女の愛を蹂躪しているのである。人間社会における秩序と和の根本となる brotherhood を否定し, 男女の関係を邪淫に墮すことによって, Claudius は, 天地・自然・人情に対して挑戦しているのである。「庭にまどろむ王を蛇がかんだ」(I. v. 35-36) と報じて世間を欺いたが, その「蛇が現在その頭に王冠をいただいている」(38-39) と亡霊が暴露するとき, われわれはこの蛇に人類の元祖を騙した蛇の祖型的悪業を見出すのである。

復讐せよとの亡霊の命令は, 悪の跳梁跋扈を黙認するな, 世を正せとの命令にほかならない。

Murder most foul, as in the best it is,  
But this most foul, strange, and unnatural.

(26-27)

Thus was I, sleeping, by a brother's hand  
 Of life, of crown, of queen, at once dispatch'd,  
 Cut off even in the blossoms of my sin,  
 Unhous'led, disappointed, unanel'd,  
 No reck'ning made, but sent to my account  
 With all my imperfections on my head.  
 O, horrible, O, horrible, most horrible!  
 If thou hast nature in thee, bear it not,  
 Let not the royal bed of Denmark be  
 A couch for luxury and damned incest.

(74-83)

父王崩御の真相を知った Hamlet の反応は、まず第一に、驚き——“what?” (8), “O God!” (24) “Murther!” (26) であり、次に、復讐の即時断行の決意である。

Haste me to know't, that I with wings as swift  
 As meditation, or the thoughts of love,  
 May sweep to my revenge.

(29-31)

いかにも Hamletらしい卒直さと言わねばならない。また、復讐すべき相手が叔父 Claudius であることを知らされたときの “O my prophetic soul!” (40)は、Claudius に対する嫌悪の情が、母の夫となった忌まわしい男という私的感情を超えた、邪悪な存在に対する強烈な拒否反応であることを示す。Hamletは鋭敏な感性を持った青年、Honigsmannの言葉を借りれば、“champion of sensibility”である。<sup>13</sup> 彼にとって Claudius に対する復讐は世直しそのものである。彼の感受性そして義務感に庭を荒れ放題のまま放置することを許さない。そのような潔癖な王子でありながら、Hamletは気後れし、たじろぐのである——“The time is out of joint—O cursed spite, / That ever I was born to set it right! (I. v. 188-89)。大義のためとはいえ、復讐は人を殺すことである。「どのような殺人でもむごたらしくないものはない」(27)と亡霊も語っている。この難題をいっそう絶望的な業にする亡霊の命令もある——“Taint not thy mind” (85)。「心を汚す」ことなく復讐の難業が達成できるであろうか。それも邪知奸佞の時の絶体的権力者 Claudius に対して。

Coleridgeは“I have a smack of Hamlet myself.”と述べている。<sup>14</sup> このローマン派の詩人・批評家のように、冥想的、知的Hamletと共通点を見出す読者はそう多くなくても、義務感・使命感を十分に持ちながらも、そして involvement の必要性を認識しながらも、なおジレンマに直面して辟易する Hamlet に親近感を抱く人は少なくないと思う。Prufrockのように、“I am not Prince Hamlet”と逃避できるわれわれ凡庸な一般市民でも、Hamlet のジレンマは人間の普遍的ジレンマとしてよく理解できるのである。

復讐は本来的に残忍な行為である。キリスト教倫理・文明が、血で血を洗い必然的に循環し頽廃をもたらす復讐を容認しないのは理の当然である。

しかし、復讐が与える満足感も人間が自然に求める感情である。*Hamlet* の主な素材とされる12世紀デンマークの史家 Saxo Grammaticus の Amleth も、Saxo を翻案したルネサンスのフランス人 François de Belleforest の Hamlet も野蛮残虐な復讐者となっている。<sup>15</sup>

Shakespeare の Hamlet はどうであろうか。母親の所業に万物汚濁を見出した Hamlet にとって、可憐な Ophelia も、父親 Polonius の命に従順で、よそよそしくなったその姿は彼を裏切った薄情な女に映る。

If thou dost marry, I'll give thee this plague for thy dowry : be  
thou as chaste as ice, as pure as snow, thou shalt not escape  
calumny. Get thee to a nunn'ry, farewell. Or if thou wilt needs  
marry, marry a fool, for wise men know well enough what  
monsters you make of them. To a nunn'ry, go, and quickly too.  
Farewell.

(III. i. 134-40)

幻滅の煮え湯を飲まされた理想主義者の痛烈な呪詛は残酷である。愛する Ophelia の言動が、母親の再婚から得た結論、“Frailty, thy name is woman!” (I. ii. 146) の真実性を実証するものであると信じこんだ青年には、眼前の真実が見えない。Gloucester 同様に、Hamlet も眼は見えてもつまずく人間の一人である。しかし、悪を憎んで自らも「心を汚し」残忍になるこの貴公子は、復讐の一念に徹する術策家にはなりきれない人間であることも明らかにする。John Bayley が最近指摘しているように、Ophelia が Polonius のおとりとして使われていることに気付いた Hamlet には、彼の「狂気」の原因が恋患いにあることを演じ抜いて、聞き耳を立てている Claudius 一味を欺く陽動作戦もとれた筈である。<sup>16</sup> それができないのも、Ophelia に対する思慕の情が激しく絶望的であるからである。状況を有利に生かせないだけでなく、Hamlet は復讐者としては軽率な脅迫の言辞さえ口ばしして、“Those that are married already all but one shall live” (III. i. 148), Claudius にイギリスへの送還を決意させる。Ophelia に対する粗暴な態度は “useless and wanton cruelty” と思えると述べた Dr. Johnson の評は正しい。<sup>17</sup> Hamlet はたしかに「汚れた」人間の残酷な姿を見せる。しかし、その「汚れ」が汚れそのものを憎悪する理想主義から生まれた事実も認めなければならない。Roy Walker の言う “inverted love of goodness” である。<sup>18</sup> 女性として最大の恥辱を受けた Ophelia 自身、Hamlet を残酷と見るよりは、かかる罵詈雑言を吐き散らす王子にルネサンスの一つの理想像の崩壊を見る。

O, what a noble mind is here o'erthrown!  
The courtier's, soldier's, scholar's, eye, tongue, sword,  
Th' expectation and rose of the fair state,

The glass of fashion and the mould of form,  
 Th' observ'd of all observers, quite, quite down!  
 And I, of ladies most deject and wretched,  
 That suck'd the honey of his music vows,  
 Now see that noble and most sovereign reason  
 Like sweet bells jangled out of time, and harsh;  
 That unmatch'd form and stature of blown youth  
 Blasted with ecstasy. O, woe is me  
 T' have seen what I have seen, see what I see!

(150-61)

Ophelia が悲しむのは、自分がひどい仕打ちを受けたからというよりも、Hamlet の「崇高な理性」が狂って調子外れになっているからである。彼女の反応は、Hamlet に対する観客の反発を相当に緩和する筈である。3 幕 4 場のいわゆる「寝室の場」における王妃に対する峻厳極まりない難詰も、行き過ぎの印象をまぬかれないが（亡霊も再び現われる）、Hamlet の “sex nausea”<sup>19</sup> も “rank corruption”(Ⅲ. iv. 148) に対する潔癖な青年の拒絶反応であり呻吟である。

Such as act

That blurs the grace and blush of modesty,  
 Calls virtue hypocrite, takes off the rose  
 From the fair forehead of an innocent love  
 And sets a blister there, makes marriage vows  
 As false as dicers' oaths, O, such a deed  
 As from the body of contraction plucks  
 The very soul, and sweet religion makes  
 A rhapsody of words.

(40-48)

Polonius 刺殺についても、Granville-Barker が述べているように、それは Hamlet の「恐ろしき変化の証拠」<sup>20</sup> となるものであると言えよう。しかし、Hamlet の一撃の下、壁掛<sup>アラース</sup>の蔭に仆れたのが Polonius であるとわかって、“Thou wretched, rash, intruding fool, farewell! / I took thee for thy better.” (31-32) とつぶやく王子に対して、漱石とともに、少なくとも瞬時、「痛快」と思う観客も少なくはないであろう。<sup>21</sup> Rosencrantz, Guildenstern を死地に追いやっても良心の苛責をあまり感じないからといって、情状を考慮すれば、Hamlet を特に冷酷だと責める気にはなれないのである。

冷酷無情な復讐の鬼と化した姿は、Hamlet が朗唱し、旅芸人が語り続ける、木馬に隠れてトロイ城内に侵入したギリシャの勇士「悪魔のごとき」(Ⅱ. ii. 463) Pyrrhus に見られる。武器も目的も暗夜のごとく黒く、さらに全身を真紅の血で塗り立てたと描写される Pyrrhus が狙うのは「老王 Priam の頭」“milky head / Of reverent Priam” (478-79) である。この血も

涙もない殺戮の悪鬼は、「復讐を追求する Hamlet がなり得るそのもの」の姿として, Pyrrhus—Hamlet のパラレルは意図的であると Prosser は主張する。<sup>22</sup> しかし、ここに作者の意図を探るとすれば、それはパラレルではなく、コントラストに見出せる。Shakespeare は、残虐そのものの姿になった復讐者を観客の「心の眼」に見せて、かかる復讐者にはなり得ない Hamlet を対照的に印象づけようとしている。Hamlet は Pyrrhus の “polar opposite” なのである。<sup>23</sup> Pyrrhus と同様に黒装束で登場したとはいえ、王子が誓った復讐は、その遂行において、神々が「天上の星の燃える眼を涙で濡らす」(517) ような残忍無惨なものにはならない。Hamlet の喪服の色は、Claudius に対する拒絶反応が、「涙で濡らす」神々の悲しみに通ずるものであることを示す黒なのである。

#### 4

亡霊の言葉の信憑性は劇中劇によって確認される。しかし、その確認は同時に、Claudius の秘密を Hamlet が知り得た事実を Claudius に明らかにすることでもある。この相互確認によって、これまでそれぞれ相手の正体を探り合っていた二人の反目が、いわば、偵察活動から敵打倒の戦いへとエスカレートすることになる。とは言え、この闘争の主導権は一方的に Claudius が握る。祈る姿の Claudius を打ち取る機会を得ながら、Hamlet はあえて手を下さない。仇敵を天国へ送るのは “hire and salary” (III. iii. 79) であって復讐ではないと言う Hamlet の独白は古くから議論の種となっているが、外観と内実の乖離に対し一際敏感である Hamlet が、Claudius の外観を無造作に受け入れるアイロニーがあることは否定できない。このアイロニーは、辛辣かつ適切な形で復讐の好機を Hamlet にもたらすアイロニーに連関するものである。魂を地獄へ落さなければ満足できないと言う Hamlet の言葉を、“too horrible to be read or to be uttered” と Dr. Johnson とともに身振りする敬虔なキリスト教徒も、これは「復讐遅延の無意識の弁解」にほかならぬとして Bradley の説に組する読者も、<sup>24</sup> 祈とう中の Claudius を背後から刺殺するのを踏みとどまる Hamlet に対して、少なくとも最終的には、失望しないようになっている。

手際よい処置をとるのは Claudius である。「即刻処刑にすべし」(IV. iii. 65) との書面とともに Hamlet をイギリスへ送還する。王子を乗せた船は海上で海賊船に襲撃され、全く時のはずみで、彼は一人捕虜になり帰国する。この Hamlet を待っているのが、二重三重の策謀をこらした暗殺計画である。

Laertes には先だめのしてない剣を使って父親の仇を討てと言え、Laertes はその剣に猛毒を塗って必殺を期すと答える。その上に、Claudius は毒杯を準備して万全の策を講じる。この狡猾卑劣な詭計は、Hamlet の鷹揚で無頓着な貴族的性格を計算に入れて練られたものである——“He, being remiss, / Most generous, and free from contriving,…” (IV. vii. 134—35)。Hamlet の nobility はさらに対比され強調される。試合に臨んで彼は Laertes に対して素直に謝り、“my brother” (文字通りそうなる筈であった) と呼び、その「寛大な心」(V. ii. 242) に訴えるのである。

多くの批評家が異口同音に述べるように、航海から帰って来た Hamlet には大きな変化が見られる。

Rashly—

And prais'd be rashness for it—let us know  
Our indiscretion sometime serves us well  
When our deep plots do pall, and that should learn us  
There's a divinity that shapes our ends,  
Rough-hew them how we will—

(6-11)

人智人為を超えた偉大な力の存在を体験を通して認識した人間の述懐である。しかし、この精神的成熟を成し遂げた（“sea-change” とも言うべきか）Hamlet が、個人的責任を放棄した運命論者に変貌したのでないことは、次の言葉でも明らかである。

Does it not, think thee, stand me now upon—  
He that hath kill'd my king and whor'd my mother,  
Popp'd in between th' election and my hopes,  
Thrown out his angle for my proper life,  
And with such coz'nage—is't not perfect conscience  
To quit him with this arm? And is't not to be damn'd,  
To let this canker of our nature come  
In further evil?

(63-70)

Maynard Mack が “universal graveyard” となっていると述べる墓場において、<sup>25</sup> Hamlet は、東洋流に言えば「生者必滅」を実感し、人生のはかなさを悟る。“To be or not to be” の独白に凝縮されている人生もろもろの苦痛懊悩も、また人間とは何ぞやの哲学的疑問も (IV. iv. 33ff.), 過去のものとなり、人事を尽してあるがままの現実を受容する澄みきった心になっている。

Not a whit, we defy augury. There is special providence in the  
fall of a sparrow. If it be now, 'tis not to come; if it be not to  
come, it will be now; if it be not now, yet it will come—the  
readiness is all. Since no man, of aught he leaves, knows what  
is't to leave betimes, let be.

(V. ii. 219-24)

David Young が、いみじくも、“detachment that is involment” と評する、精進する者の平穩清澄なる心境に Hamlet は到達したのである。<sup>26</sup>

かくして、“canker of our nature” (69) の除去根絶を再確認しながらも、その具体的実行計画を思案する間もなく、Hamlet は Claudius が仕組んだ試合に臨むのである。



*Hamlet* において、墓穴を掘るのは墓掘りばかりではない。Claudius の完璧を期した Hamlet 返り討ちの策略がその墓穴となる。Hamlet の復讐を完遂へと導くのはほかならぬ Claudius なのである。祈る Claudius の姿の真実を見抜くことのできないアイロニーについては既に述べたが、良心の苛責を感じながらも獲得した王冠と王妃に執着して、しばし生き延びた Claudius の誅戮は、篡奪王みずから策した奸計が可能にするのである。*King Lear* 同様、この作品に数多く見られる自滅を意味する表現やイメージが悪の自己矛盾・自壊とかかわる主題的なものであることは強調されてよい。

*Pol.* This is the very ecstasy of love,  
Whose violent property fordoes itself.

(II. i. 99-100)

*P. King* The violence of either grief or joy  
Their own enactures with themselves destroy.

(III. ii. 196-97)

*King* O limed soul, that struggling to be free  
Art more engag'd!

(III. iii. 68-69)

*Ham.* For 'tis the sport to have the enginer  
Hoist with his own petar....

(III. iv. 206-7)

*Queen.* So full of artless jealousy is guilt,  
It spills itself in fearing to be spilt.

(IV. v. 19-20)

*Ham.* Their defeat  
Does by their own insinuation grow.

(V. ii. 58-59)

*Laer.* Why, as a woodcock to mine own springe, Osric:  
I am justly kill'd with mine own treachery.

(306-7)

*Laer.* The foul practice

Hath turn'd itself on me.

(317-18)

*Laer.* He is justly served,  
It is a poison temper'd by himself.

(327-28)

*Hor.* And in this upshot, purposes mistook  
Fall'n on th'inventors' heads....

(384-85)

(引用は一部重複する)

## 5

*Hamlet* の世界は闘争, duel の世界である。単純に図式化すれば, 善と悪, 理性と情念, 愛と獣欲, 高貴と賤しさが, 相拮抗し角逐する世界であると言えよう。もちろん, *Hamlet* が悪に汚れ, *Claudius* も苛責を受ける良心をもった人間として示されているように, この図式は, over-simplification の弊はまぬかれないが, 基本においては正しいと思う。<sup>27</sup> この鎬を削る大きな力と力, “mighty opposites” (V.ii. 62) を立廻りの活劇として, 視覚的にも聴覚的にも強力に訴えるのが, 最終幕の試合, duel である。劇的であると同時に象徴的であるこの試合において, *Laertes* の卑劣卑怯な騙し打ちの毒剣は, *Hamlet* の手に渡って破邪顕正の剣に変わる。試合半ば, *Laertes* は良心の咎をふともらすが致命傷を受ける。自分の死も自業自得であると告白し, 策略の仕掛人が *Claudius* であることを暴露して息絶える。

Why, as a woodcock to mine own springe, Osric:

I am justly kill'd with mine own treachery.

(306-7)

*Claudius* が制止する間もなく, *Gertrude* はそれとも知らずに毒杯をあおぐ。先王暗殺に使われ, 比喩的に言えば *Gertrude* を毒しデンマークに病毒を伝播し, そして *Laertes* の剣先に塗られた毒薬のもられた祝杯である。しかし, *Gertrude* も, *Claudius* の取り繕いをきっぱり否定し, *Hamlet* に “union”——真珠(そして *Hamlet* の辛辣な地口があらわすように結婚)の真相を知らして母親として死ぬ: “No, no, the drink, the drink——O my dear *Hamlet*——/The drink, the drink! I am pois'ned.” (309-10) *Hamlet* を殺害せんとした陰謀を共犯者である *Laertes* によって公然と暴露非難され, 寵する王妃を死に至らしめた *Claudius* に対して, *Laertes* の毒剣によって瀕死の重傷を負った *Hamlet* は同じ剣で一撃を与え, 残った毒酒を飲み込まず。まさに「当然の報い, 天罰」“He is justly served” (327) である。私的復讐と公の処罰が一致するのである。*Hamlet* の仇討ちは, public justice の執行であり, 神の代行者としての行為になる。<sup>28</sup>

既に触れたように、亡霊の命令を受けたとき、Hamlet は残酷な行為である殺人という復讐を“meditation”や“thought of love”のように早い翼を駆って実行したいと決意している。彼の言葉のイメージの矛盾（殺人と冥想、愛の想い）は、復讐の暴力性を物語るものであると、Prosser は指摘し、Hamlet の復讐が倫理道徳に反し、悪魔的であるとする主張の論拠の一環にしている。<sup>29</sup> しかしながら、Hamlet の復讐の行為は「冥想、愛の想い」と矛盾するものではない。

愛と言えば、Ophelia が Hamlet の愛情を父親に知らせたとき、Polonius は“Affection! puh!”（I. iii. 101）と言下に否定し嘲笑している。妹思いの Laertes も父の子であって、Ophelia が王子に玩弄されるのではないかと心配した。当の Ophelia 自身、狂えば卑猥な歌も口ずさむ。また、前に述べたように、Hamlet をして万物汚穢の思いをさせ嘔吐を催させたのは母親の淫欲不倫であった。しかし、Hamlet を絶望させた種類の男女関係が愛のすべてではないことは言うまでもない。Shakespeare の他の作品においても見られるように、悪に挑戦し、王位の篡奪を否定し、理性の命令を嘉し祝するのが本来の愛である。<sup>30</sup>

帰国後、はじめて公の場に現われる Hamlet は父王が奪われた称号を名乗る。

This is I,

Hamlet the Dane!

(V. i. 257-58)

デンマーク王子として Hamlet は声高らかに叫ぶのである。

I lov'd Ophelia. Forty thousand brothers

Could not with all their quantity of love

Make up my sum.

(269-71)

この情熱的な愛の宣言は、“rose...of innocent love,” そして結婚の誓いに価値を見出す愛の宣言であり、その愛は、友人から毒杯を取り払い、そして国家の平安を念じて息絶える行為と表裏をなすものである。“I loved Ophelia.”と過去形にはなっているが、Laertes の大仰な悲しみの表現に思わず踊り出る Hamlet の行動自体が、その心情の現在形を雄弁に物語る。Ophelia に対する愛情は、父王の命令に服することによって示す親を想い国を憂う心に通ずるものである。弑逆が不倫と不離一体の悪事として認識されているように(crown, queen の頭韻にも注意すべきか)、Hamlet にとって、復讐と無垢な愛の回復を求める心情は同じ根源から発するものである。そして、笹山隆氏が鮮やかに述べているように、Ophelia には、「戸外の光、緑の自然、とりどりの花、そして流れる水」という甘美なファンタジーの連想がある。<sup>31</sup> 無垢のシンボル、生命の肯定としての Ophelia 像である。

G. Wilson Knight は、Hamlet は病める魂であり死の使者であると理解する。そのような Hamlet が復讐の大任を命じられ、国の浄化をはかり調和をもたらそうとするとところにこの作品の特異性があるが、病める人間が他を癒し浄化できる筈はなく、国家をいっそう混乱させると言う。Hamlet という悪から善が生れるわけではないと言う。<sup>32</sup> しかし、Knight のこのような

Hamlet 観こそ病的、倒錯症的であると断ぜざるを得ない。ここで、エリザベス朝の劇壇を賑わした復讐劇一般について論ずる余裕はないが、大好評を博して復讐劇の人気を一躍高めた Thomas Kyd の *The Spanish Tragedy* (初演1587—89) や Shakespeare の悲劇第一作 *Titus Andronicus* (初演1589—90) の復讐者たちと単純に比較しても、Hamlet の特異性は明らかである。Hieronimo や Titus の血に飢えたような残忍さの前では、義務遂行の過程において「汚れる」とはいえ、Hamlet は観客の共感を致命的に喪失することはない高潔ノブルな王子である。Hamlet の身近な復讐者 Laertes の私的憎悪心から生まれる狂暴さも復讐者の典型を示すものである。Hamlet の寛闊なあいさつ “I'll be your foil, Laertes” (V. ii. 255) もあるけれども、Laertesの方が復讐者としての Hamlet の名誉ある特異性に輝きを与える “foil” となっている。

一幕一場の陰鬱不気味な一夜が過ぎ、キリストの生誕を祝う「浄福の満ち溢れる」夜が語られ、東の空にさし始める曙光に勇気づけられる Horatio は Hamlet の名前を口にする。それは、敬愛の情 “our love” と義務の念をもって Hamlet の名前が始めて語られる瞬間である。黙して立ち去る亡霊も若き Hamlet には語るであろうという期待感がこめられている。デンマークに光をもたらし、国のはずれた関節を直す王子にふさわしい紹介であると言えよう。愛情と義務感こそ Hamlet を特徴づけるものであり東雲の光と自然に溶け合う資質である。だからこそ Hamlet の作業が「荒削り」であっても、絶対者がそれを「仕上げて」くれるのである。Bacon の言葉を再び引いて述べれば、Hamlet の「私的復讐」は「公的復讐」となっており、「私的復讐」が内包する「野蛮性」は “fortunate” なものへと変容するのである。

#### 註

1. *Hamlet, Prince of Denmark*, ed. Frank Kermode in *The Riverside Shakespeare*, eds. G. Blakemore Evans et. al. (Boston: Houghton Mifflin Company, 1974), V. ii. 358. 以下 *Hamlet* からの引用はすべてこの Riverside 版による。
2. ロマ書, 12: 19.
3. Francis Bacon, *Essays* (1625, rpt. Everyman's Library, London: J. M. Dent & Sons, 1958), p. 14.
4. Eleanor Prosser, *Hamlet and Revenge*, 2nd ed. (Stanford: Stanford University Press, 1971, p. 10.
5. Maynard Mack, “The World of Hamlet,” in *Tragic Themes in Western Literature*, ed. Cleanth Brooks (New Haven: Yale University Press, 1955), pp. 51-52.
6. Harry Levin, *The Question of “Hamlet”* (1959, rpt. New York: Oxford University Press, 1970), p. 35. Cf. “Revenge for Hamlet as for his audience is morally demanded by the situation which Claudius has created and by an ethic accepted in the popular culture represented by a generation of revenge plays; yet it is morally condemned by the Christianity of both *Hamlet* and its audience.” Norman Rabkin, *Shakespeare and the Common Understanding* (New York: The Free Press, 1967), p. 4.
7. 市川三喜、嶺卓二編注 *Hamlet* (1963, rpt. 研究社, 1977), pp. xx, xxvi.
8. 中野里皓史『『ハムレット』における復讐とハムレットにとっての復讐』中野里皓史、玉泉八州男編『イギリス・ルネサンス——詩と演劇』(紀伊国屋書店、昭和55年)。
9. Richard T. Brucher, “Fantasies of Violence: *Hamlet* and *The Revenger's Tragedy*,”

*Studies in English Literature*, 21(1981).

10. 夫の兄弟との再婚が「近親相姦」と見做されたことはよく知られているが、英国においてこのような結婚が法律上認められたのは1921年であるという。Nigel Alexander ed. *Hamlet* (1973, rpt. London: Macmillan Education Limited, 1976), p. 44.
11. Harley Granville-Barker, *Preface to "Hamlet"* (1946, rpt. New York: Hill and Wang, 1957), p. 237.
12. たとえば, G. R. Elliott, *Scourge and Minister: A Study of "Hamlet"* (Durham, N. C.: Duke University Press, 1951), p. xxxii.
13. E. A. J. Honigmann, *Shakespeare: Seven Tragedies; The Dramatist's Manipulation of Response* (1976, rpt. London: The Macmillan Press, 1980), p. 68. Cf. "My father's spirit—in arms! All is not well, I doubt some foul play." (I. ii. 254-55).
14. *Coleridge on Shakespeare*, ed. Terence Hawkes (Harmondsworth: Penguin Books, 1969), p. 158.
15. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, ed. Geoffrey Bullough, VII (London: Routledge and Kegan Paul, 1973).
16. John Bayley, *Shakespeare and Tragedy* (London: Routledge and Kegan Paul, 1981), p. 177.
17. *Dr Johnson on Shakespeare*, ed. W. K. Wimsatt (Harmondsworth: Penguin Books, 1969), p. 141.
18. Roy Walker, *The Time is Out of Joint: A Study of "Hamlet"* (1948, rpt. Folcroft, Pa.: Folcroft Library Editions, 1971), p. 95.
19. J. Dover Wilson, *What Happens in "Hamlet"* (1935, rpt. Cambridge: The University Press, 1964), p. 306.
20. Granville-Barker, p. 112.
21. 『漱石全集』第20巻(漱石全集刊行会: 昭和4年), p. 15.
22. Prosser, p. 155.
23. Levin, p. 151. Cf. "Pyrrhus in killing the old king is simultaneously the model of the heroic revenger Hamlet feels he ought to be and a warning against being that revenger." Alvin B. Kernan, "Politics and Theatre in *Hamlet*," *Hamlet Studies*, 1 (1979), 3.
24. Johnson, p. 140; A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (1904, rpt. New York: Meridian Books, 1957), p. 113.
25. Mack, p. 57.
26. David Young, "Hamlet, Son of Hamlet," in *Perspectives on "Hamlet"*, eds. William G. Holzberger and Peter B. Waldeck (Lewissburg, Pa.: Bucknell University Press, 1975), p. 205.
27. Wilson, 276; Mack, p. 63; Nigel Alexander, *Poison, Play and Duel: A Study in "Hamlet"* (London: Routledge and Kegan Paul, 1971), p. 24.
28. Fredson Bowers, "Hamlet as Minister and Scourge," (1955) in *Twentieth Century Interpretations of "Hamlet"* ed. David Bevington (Englewood Cliffs, N. J.: 1968), p. 86; Helen Gardner, *The Business of Criticism* (1959, rpt. London: Oxford University Press, 1966), p. 47.
29. Prosser, p. 134.
30. たとえば *King Lear* や *Tempest* において.
31. 笹山隆「『ハムレット』の風景——光と闇」『イギリス・ルネサンス——詩と演劇』p. 51.
32. G. Wilson Knight, *The Wheel of Fire*, 4th rev. ed. (1949; rpt. New York: Meridian Books, 1957), p. 20.

原稿受理1981年9月20日

## Hamlet and Revenge

Seiki Kinjo

*Hamlet* is a revenge play, but the theme of revenge in *Hamlet* has been, as Harry Levin noted years ago, "the common stumbling block." The Ghost in the play commands Hamlet to "revenge his foul and most unnatural murder," and this demand seems to be morally supported by the situation of the play. Yet, on the other hand, Eleanor Prosser's conclusion that "Elizabethan moralists condemned revenge as illegal, blasphemous, immoral, irrational, unnatural,..." also seems to be plausible. Is the conflict between the demand of the play and the ethic of the time irreconcilable, and are we to feel Hamlet's killing of Claudius as "painfully ugly," as a critic recently asserted in a British journal?

The world of *Hamlet* is an unweeded garden, sick at heart—a world in which evil is triumphant. The cause of this corruption is of course Claudius, the usurper, who denied brotherhood by committing the primal eldest curse and who made a mockery of love by "incestuously" marrying his brother's widow. Hamlet's revenge is in response to a call of conscience and duty; it is a princely act fundamentally related to his love of Ophelia in that his idealistic concept of love is part and parcel of his idealistic notion of kingdom and human relationship. To be sure, Hamlet does taint his mind in the course of action or inaction. He does become a scourge. However, the prince of Denmark we see after his return from the voyage to England is a matured man now reconciled to human reality, a man who has moved to "a detachment that is involvement," to quote David Young.

Chance events and Machiavellian schemes bring about the duel, the final showdown of mighty opposites, between good and evil, love and lust, nobility and baseness. But unpredictable happenings cooperate with Hamlet, evil itself revealing its self-destructive nature. In the final analysis, Hamlet's revenge becomes public as well as private. Hence, what prompts Hamlet to take revenge is not the wild nature of private revenge, as Francis Bacon insisted, but his sense of justice and deep feelings of redemptive love.